

(1) 船上生活者のオーラルヒストリー (一)

語り手：渋田幸子 (元・船上生活者)

1945年1月4日生

石橋英子 (元・船上生活者)

1946年8月12日生

聞き手：田上繁、森武麿、若宮幸一、藤川美代子

新垣夢乃、近石哲、平田茉莉子

聞き取り日：2011年8月2日

場 所：若松海員組合会館 (若松区本町)

児童ホームでの生活

石橋： 児童ホームのときの思い出といえばですね、100人ぐらいの人が一緒に食事するじゃないですか。

近石： えっ、そんなに入ってますか。

石橋： そう、入ってたんですよ。当時はですね。もちろん、その時代によって。例えば、少なくなったり、120人ぐらいになったりするんですけどね。

田上： 百何人？ 多い。

石橋： わたしなんかのときは、100人ぐらいですね。120人ぐらいいたときもありますね。で、食事を全員でするんですよ。そのときですね、先輩たちが好きなおかずとかあったりしたら、ね、「それちょうだい」とかいうんですよ。そしてですね、「いや、これやらん。好きだからやらん」っていうと。

近石： はは。やらんって。

石橋： すぐいじめられよったんですよ (笑う)。

渋田： いじめよったんが、わたしやろ？ そんなことやろ？ ポスがおるんですよ。

石橋： そのことをですね、わたしがこれに書いて。

渋田： (笑う)

石橋： で、なぜかね、その先輩と今一番仲いいんですよ。

森： この先輩。

田上： この先輩だ (笑う)。だいぶおかず取られたんじゃ (笑う)。

石橋： 大丈夫ですよ、やらなかったもん (笑う)。

近石： ご飯は一斉に食べるんですか。

石橋： うん。一斉に食べるんですよ。

近石： 広ーいところでしょ、じゃあ。

石橋： 結構ですね。だから、お弁当とかもですね。中学生になると、寮のおばちゃんがお弁当作ってくれるんです。おんなじお弁当ですよ。弁当箱がずーっと並んどるんですよ。

田上： 小学校は給食があるけど、中学は弁当でしたから。われわれ、うん。そう、そう、そう。

石橋： で、一番いやなのはね、お風呂が、男の子が先に入って、女の子は常にあとなんですよ。だから、わたしは「絶対それはおかしい」って言って、異議を申し立てて男の子と女の子を交代に入るようにしたんですよ。弟子丸 (でしまる) のおばあちゃんからね。

渋田： うん。

石橋： 「とっんでもない子」だって。「こーんな子はね、今までおらんやった」って。

渋田： わたし、別になんとも思わんやったけど。ほんなっくさ、そういうの思わんやったね。

石橋： うん。絶対いやだった。だけ、「なんでそんな不公平」とかいった。弟子丸 (でしまる) のおばあさんからね、相当怒られたんですよ。

(笑う)。「そんなこと、聞いたことない」って。女が先に風呂入るとか。

近石： 女が。ああ、そういう時代でしたよね。

石橋： そうなんですよ。

田上： 今は変わってますよ。

渋田： わたしたちが入る前のですね、年代の人は、ハカリメシ（計り飯）やったらしいんですよ。

近石： それ、どういうんですか。ハカリメシ？

田上： 自由に何杯も食べてはいけないのね。そういうのじゃない？

渋田： なんていうかね、計りがあるでしょ。それにカネの食器やったね。

石橋： うん。

渋田： カネの食器に入れて、ほして、何グラムっち計って。で、おかわりなし。まあ、わたしたちより前やから、戦時中か戦後、わたしたちは戦後やからですね。そんな人たちは、食糧がないころでしょうね。ハカリメシच्छて。わたしもハカリメシ、ハカリメシच्छなんのことかねえ、わたしたちハカリメシच्छ食べたことないのにच्छ思っった。

石橋： うん。

渋田： そういうことみたいですよ。

石橋： でも、やっぱり児童ホームに入ってた人たちって、貧しい子みたいに思われच्छったんやない？

渋田： うん。

石橋： あのころではね。

田上： ねえ、僕らのころにはいた。

渋田： 戦災孤児とか、なんかね。

石橋： そうね。

渋田： 悪いことをしてから、なんていうんですかね、少年院？

藤川： はい。

渋田： なんか、そんな感じをもच्छったやろ。

石橋： イメージ的にはね。

田上： ほう、オカ（陸）の者はね。

石橋： うん。

近石： わたしらの子供のときに、孤児院っていうのありましたよ。

渋田： はい、はい。そう、そう、そう。

近石： あの、親のいない。

渋田： うん。

近石： だから、すみません、失礼だけど、そういうイメージは正直च्छてありました。

渋田： そうよね。わたしもそうच्छ思う。

近石： 児童ホームच्छていわれると。

渋田： うん、うん。ほやけ、施設च्छていう、その、施設じゃないけど。家なんですよ。ホームなんですよ。

石橋： 恵まれない子供やん？ わたしたち。

田上： いや、いや。

石橋： (笑う)

田上： 今から恵まれます、こういう。

石橋： ね、ほらいろんなところに招待されたりね。

渋田： ああ、しよच्छたね。

石橋： ほら、野球選手と一緒で遊んだりさ、プレゼントいっばいもらच्छたり。

ハシケの移動により帰船できない入寮生

田上： 児童ホームの話にまた戻りますと、どうしても、遠くへ行च्छてる場合は、帰れないじゃないですか。

渋田： うん。

田上： そういうときには、また、居残りになる訳ですか、児童ホームに？

石橋： そうですね。

田上： つまり、遠くねえ、広島とかあच्छちのほうへ行च्छてると。

石橋： うーん。

田上： 土曜日に、帰च्छてそれを追いかける訳にはいかないでしょ。

石橋： そうですね。

田上： 追いかけるというのは、もう門司ぐらいまでは追いかける？

渋田： そう、そう。

田上： 門司ぐらいまで？

渋田： いや、わたしはもう児童ホームに入って、門司に行ってるうちことが分かったら、もう始めから帰ったりしなかったけど。その1年生から3年生まで。

田上： うん。向こうの広畑。

渋田： いや、いや。えっとね、その中に何回か、何カ月か1年か分かんけど、若松洞海湾におったんです。入学は古前小学校でしたんですよね。1年生の2学期ぐらいから、多分広畑に行ったと思うんですけどね。朝出るときは、結構埠頭に停まるとるんですよ。ほで、「行ってきます」って行くじゃないですか。ほで、昼過ぎごろ帰って来て、そこを洞海湾に行ったら、船がおらんのですよお。そして聞いたら、なんか、「いやあ、門司の片上にね、行ったよー」ちていうけえ。で、それから、また門司の片上までもう帰ったことありますよねえ。もう真っ暗なってますねえ。

田上： あっ、そうか。もう始めから門司に行ってるって分かってたら、もう児童ホームで？

渋田： いや、それは児童ホーム入ってないとき。

田上： あっ、入ってないとき。

渋田： うん、じゃけもうどうしても、そこにおっても、船に帰らんことには。もう児童ホームに入っていないときやからね、通学してるときやから。

藤川： だから、どこまででも追いかけないと駄目？

渋田： うん、まあ、そんなに遠くには行かないからですね。うん。そういうことあったですねえ。

田上： で、児童ホームに入って、どの辺りまで土曜日の午後から帰るようになります？ 門司辺りにいるとしたら、もう児童ホームに、その日は帰らない？

渋田： 親が迎えに来よったねえ。

石橋： うん。

田上： 来ました？ やっぱり。

渋田： うん。自分で帰った？

石橋： いや、迎えに来よった。

渋田： ねえ、迎えに来よったねえ。

石橋： わたし、せっちゃん（父親と同じ船仲間の若い人）が迎えに来よった。

渋田： ほんと？

石橋： うん。

田上： ほんと？ かなり向こうへ行って、親御さんが来れないところもある訳でしょう。

石橋： そうですね。だから、いろんな、いろんな人がいたね、やっぱりね。

渋田： みんな、その土・日、空になるっことはないですよ、いない人もいます。

田上： そうすると、もう2週間会えないということ？ 親に。

渋田： そうですねえ。

石橋： ざらだね。2週間会えないとか、1カ月会えないとかいうのはね。

渋田： うん。

田上： そうですか。

渋田： で、始めこそなんかもうわたし、あそこの玄関に行ってから、洞海湾見て泣きよったけど、慣れるね。

石橋： また、慣れていかなきゃね。

渋田： うん。

田上： 今だったらね、携帯電話で連絡すりゃあね。

石橋： そうですね。

田上： 当時は、携帯も電話もできないでしょう。だから、ねえ。伝書鳩飛ばすって訳にもいかないしねえ。

渋田： ほんと、今思うとそんな生活があったんかなっち思うけど、あったんですよえ。

ウロさん

石橋： やっぱり生活としては、もう水のこととか、いろんな困ったことはたくさんあったね。

渋田： うん、うん、うん、うん。

田上： (ハシケが) 鉄製になっても、水のことは必要なの？

石橋： ああ。おなじですね。ええ。ただ、なんですかねえ。さっきいったでしょう、水売りの話をしてたでしょう。わたし、水売りというのはちょっと記憶にないんですけどー。伝馬船にですね、ドラム缶をこう3本ぐらい積んで、水を買に行く訳なんですよね。陸の給水所のところに。で、買いに行って、満タンにして帰って来るじゃないですか。したら、船が空のときはですね、つるべ(バケツ)で上からつり落として、そのドラム缶の水を、つるべで汲みあげて上にこう、上げるんですけどね。途中でこの、船の横にそれが当たって、水が、せっかく買って来た水がね、わっとこぼれる訳ですよね。だから、どれぐらいの金額で買って来たっていうのは全然記憶にないですけども、買って来たお水の多分3分の1ぐらいは、もうまた水に……。ああ、水ってか海にね。

渋田： うん、うん。

石橋： 捨てちゃってしまって。そのリズムがですね、父と母のリズムが、つるべを下ろす、水を汲む、上に汲み上げるといふ、このリズムがうまくいかないと、寒いときでももう父は上からぼっと水を母に被せてたんですよ。短気だったから。

渋田： 私は、それ……。

田上： ない？

渋田： 記憶にない。あの水ウロさんちってですね、その伝馬船の大きなボートみたいななんに、中にその船底に箱みたいなのに、水を入れとるんですよ。で、向こうとこっちとでから、こう押して、そしたら今度、ポンとホースがあって、ホースをうちの船のタンクに持って行って、ほんで両方でこういうふうに押すじゃないですか。そして、もういっぱい

になったら、こっちが「いっぱいになりましたー」ちな合図を送ったら、その人たちがこーやめて、うん。そんなんを覚えとる。

石橋： それ記憶にない。

渋田： ない？

石橋： それ、後なのかねえ？ 買いに行くって。

渋田： こういうぐらいの大ーきなね、ゴムのホースでね、蛇腹のね。そして、それをこう2人のおいちゃんが、こう突くわけよ。ポンプをこうして。ほいでその水圧にこうずーっとタンクに、うん。ほして、船がこう揺れるから、それで水は腐らないんですよ。じーっとそのままタンクに置いとけば腐るけどね。波でね、こうタップタップするけん。もう、ずーっとその水は使える訳ですよ。一番やっぱ、大切なのは水やったですね、わたしたちは。それで絶対、顔洗った水もそのまま捨てないで、なんかほかに使うとか。そんなんしよったですね。

田上： 水は生活にはどうしても欠かせないし、じゃあ、炊事するときにも要りますよねえ。

渋田： そうですねえ。

藤川： タンクはどこにあったんですか。船の中の、上ですか、下？

石橋： このすぐ横ぐらいよね。

渋田： この辺かも知れんね。部屋の外やったもんね。

藤川： 外に？

渋田： ええ。大ーっきなタンクなんですよお、木のね。木の大きなタンク。そして、なんか外側にコールタールかなんか塗っとったような気がするんやけど。その木にですね。

若宮： そうですね、黒いね。

渋田： うん。なんかそんな気がします。

若宮： だから、古前にポンプ屋さんがあったんですかね、宮脇ポンプ店って。

渋田： ああ。宮脇さん。

若宮： あった。ポンプ造りよったですよ。

渋田： なんかちょうど宮脇さんから、メガネ橋、知ってます？

若宮： 知ってます。

渋田： はい。あすこに水ウロさんが。

若宮： あって。

渋田： 付けよったんですよ。

海で事故に遭った子供たち

石橋： ゆき（幸）ちゃん、海に落ちたことなかった？

渋田： あるー。

石橋： （笑う）

渋田： ある。

石橋： 何回も。そのね、先のこのなんていうの、歩みのとこでポコッとね、踏み外して落ちたり、ありましたね。妹は結局やっぱり、海に落ちて死んじゃったんです。

田上： ああ、そうですか。

渋田： いやあ、わたしの弟も死んだ。

石橋： あっ、やっぱり。海に生活してる人、子供はもう1人や2人、たいてい海で亡くなってますねえ。

田上： そりゃあ、お父さんやお母さんは辛かったですでしょう。

渋田： そうですねえ。ほんと、気の狂ったみたいになっとったもんね。

田上： そりゃあ、そうよねえ。そうですか、もういくつぐらいで？

石橋： 小学校。小学校1年生っていうときに亡くなったんですよ。

渋田： うちも。私のすぐ下の弟。

石橋： 隣の船に遊びに行っていてです。船がこういうふうになってるじゃないですか。で、行くところがないから、結局隣のおじさんとことかに遊びに行つて。母は、その隣の船にいて、行つてるところを見てるから、「あなた方に遊びに行った」っていつてるけども、もう事故が起きて死んじゃったから、向こうの

船の人は来てないっていわれる。だから、結局は水掛け論で。で、苧田港って行って、今は栄えてる。そこに仕事に行つて、電話もなければもちろん、その救急車とかも来ないし。だから、今の時代だったら、たぶん死んでなかったと思う。いろんな手当が遅れて（涙ぐむ）、死んじゃったんですね。

渋田： そうなんだ。わたし、病気かち思った。弘子（ひろこ）ちゃん。

石橋： うん。[]さんの船に遊びに行つて死んじやった。

渋田： ほんとね？

田上： なに、弟さん？

渋田： はい。わたしは、えっと、そのときはもう児童ホームにいたんですかねえ。わたしも3年間ぐらいやっぱり船から通つたんですよ、小学校から。1年から3年まで。4年から児童ホームに入ったからですね。

石橋： そうなんだ。

渋田： だから、児童ホームに入つてないときかな、日曜やったんですよ。で、うちも一緒に、4月から入学のふた月やったんですよ。

田上： その弟さん？

渋田： はい。で、みんなで遊んで、父がご飯食べるときに、5人兄弟だったんですね。で、こう頭数数えて、「1人足りん」ちて、ほて、こう名前呼んで、シゲキって弟なんですけどね、「いや、シゲキがおらんど」ってね。それから、みんなでから探したんですけどね。だから、こう船があつてですね、船が。船と船がこうぶつかつて、傷が付かんように、ペンドルっていつてですね。タイヤのようなこう板がね。そのペンドルの、こうチェーンがあるでしょう、大きな。それをトモ（鱧）からオモテに来よつて、これにつまづいて、海に落ちたんですよ。で、なかなか分からんで。みんなで、こう、なんていうのかなあ、タコバリみたいな、こう。はい、

あれですね。あれでずーっと探ったら、このズボンの裾に引っかかって。上がってきたんですよねえ。でも、それが不思議なんですよねえ。やっぱこんなことあるんやろって思うんですけどね、みんなたいがい一通り、そこをこう行ってくれたおじちゃんたちおるんですけどね。もの凄いその弟を可愛がってくれとったおいちゃんが、もう、みんなが通った後に通って、その人に引っかかって来たんですよね。「やはり、なんかそんなんがあるんやねえ」っていつてから。

田上： ふうん。そうすると、じゃあ、落っこちたときは誰も？

渋田： (手が) 空いてなかったんですよ。

田上： なるほどねえ。いやあ、船上で生活されるとか、われわれの陸で考える以上の危険がねえ。ご両親とかねえ、ご兄弟とか辛かったでしょう。

渋田： わたしたちはそんなことなかったけど、その子だけがなんか、災難を全部被ったっていうかな。オモテの船とか、ボートとかに、こう綱をつなぐでしょ。そのときに、こう、あれ、なんていうんですか、アンチャ……？

近石： ウィンチ。

渋田： あっ、ウィンチ、ウィンチ。そう、ウィンチね。

近石： 手巻きの。

若宮： そいで、歯車がついて。

渋田： そう、そう。歯車があつてね。

若宮： あれ、油さしてね。

渋田： そいで、父が母がこう回しよったんですよ。そしたら、その弟が、一緒になって回しよってですね、そのウィンチに。

近石： あっ。

渋田： 指挟まれて。ほいで、なんかこんなんになってですね。かわいそうだったですね。

田上： そのシゲキ君が。

渋田： はい。その子ばかりなんかそんな。

森： 何歳ですか、その亡くなったとき。

渋田： 亡くなったときは、6歳ですかね。

石橋： でも、あのウィンチも危なかったね。こう巻いてて、手を緩めて力を抜くと、パーッと反回転……。

渋田： そう、そう。

石橋： で、怪我したこととかもね。

渋田： そう、そう、そう。

近石： ああ、そうでしょうね。逆回転でね。

渋田： うん、うん、うん。